

確率的 Löwner 方程式入門

香取眞理 (中央大学理工学部)

21 March 2006 (version 1)

1 複素上半面内の道の hull と共形写像

•

$$\mathbb{H} \equiv \text{複素上半面} = \{z \in \mathbb{C} : \text{Im} z > 0\}$$

時刻 $t = 0$ に原点をスタートした点 $\gamma(t), t \geq 0$ が $\overline{\mathbb{H}}$ 内に連続な道 (path) を描くものとする. $\gamma(t)$ は, 自分自身や実軸と衝突できるが, 衝突は“瞬間的”であるとする.

時間区間 $[0, t]$ に $\gamma(t)$ が描いた道を $\gamma[0, t]$ を記すことにする. 次のように定義する (図 1 参照).

$$H_t = \mathbb{H} \setminus \gamma[0, t] \text{ の非有界な連結領域}$$

$$K_t = \overline{\mathbb{H} \setminus H_t} \dots \text{これを道 } \gamma[0, t] \text{ の hull とよぶ}$$

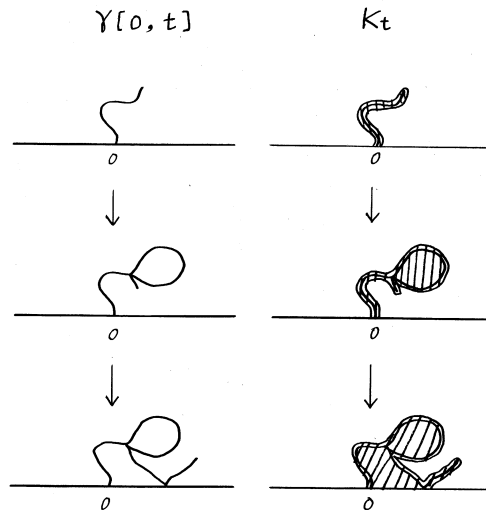


図 1: 道 $\gamma[0, t]$ と hull K_t の時間発展の様子

- 各時刻 $t \in [0, \infty)$ において, $\mathbb{H} \setminus K_t$ は \mathbb{C} 内の単純連結領域なので, **Riemann の写像定理**により

$$\mathbb{H} \setminus K_t \mapsto \mathbb{D} \equiv \{z \in \mathbb{C} : |z| < 1\} \text{ (単位円板)}$$

なる共形写像が存在する. また

$$\text{共形写像 } f(w) = \sqrt{-1} \frac{1+w}{1-w} \text{ によって } w \in \mathbb{D} \mapsto f(w) \in \mathbb{H} \text{ に写像される}$$

(\mathbb{D} の中心である原点は $z = \sqrt{-1}$ に写る) ので, この二つの合成写像として $g_{K_t} : \mathbb{H} \setminus K_t \mapsto \mathbb{H}$ なる共形写像が与えられる (図 2 参照).

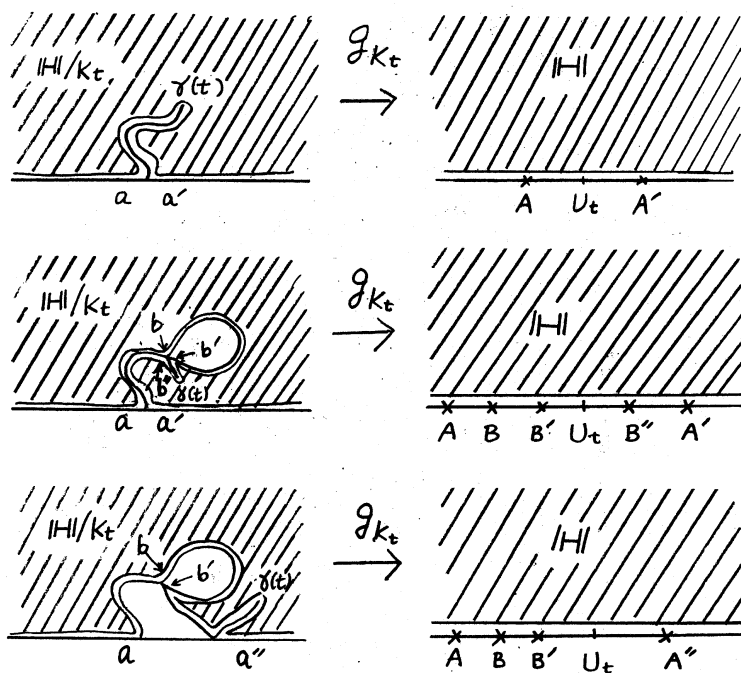


図 2: 共形写像 g_{K_t} の時間発展の様子. 道の先端 $\gamma(t)$ は実軸上の点 $U_t \equiv g_{K_t}(\gamma(t))$ に写る. $A = g_{K_t}(a)$, $A' = g_{K_t}(a')$ などとした.

- 以下しばらく t は固定して, K_t を単に K と記すことにする. $g_K : \mathbb{H} \setminus K \mapsto \mathbb{H}$ として, 無限遠点 ∞ を無限遠点 ∞ に写すものを選ぶことにする. するとこれは, $z = \infty$ の周りで

$$g_K(z) = b(K)z + a_0(K) + \frac{a_1(K)}{z} + \frac{a_2(K)}{z^2} + \dots$$

と展開できる. $z^n, n \geq 2$ の項がないのは, 像 $g_K(z) \in \mathbb{H}$ であるため: $0 < \theta < \pi$ として $z = re^{\sqrt{-1}\theta} \in \mathbb{H}$ とすると, $z^n = r^n e^{\sqrt{-1}n\theta}$ であるので, 一般には $z^n \notin \mathbb{H}, n \geq 2$ である.

g_K によって $\mathbb{R} \setminus K \mapsto \mathbb{R}$ であるから, $z \in \mathbb{H} \setminus K$ を実軸上の点 $z_0 \in \mathbb{R}$ に近づけると $\text{Im} g_K(z) \rightarrow 0$ となる. このような共形写像 $g_K : \mathbb{H} \setminus K \mapsto \mathbb{H}$ は, **Schwarz の鏡像の原理**によって, $g_{K^*} : \mathbb{C} \setminus K^* \mapsto \mathbb{C}$

に解析接続できる. ただしここで $K^* = \{z : z \in K \text{ or } \bar{z} \in K\}$ である. このとき,

$$g_{K^*}(\bar{z}) = \overline{g_{K^*}(z)}, \quad z \in \mathbb{C} \setminus K^*$$

が成り立つ (図 3 参照). このことから, 上の展開係数 $b(K), a_0(K), a_1(K), \dots \in \mathbb{R}$ が結論される.

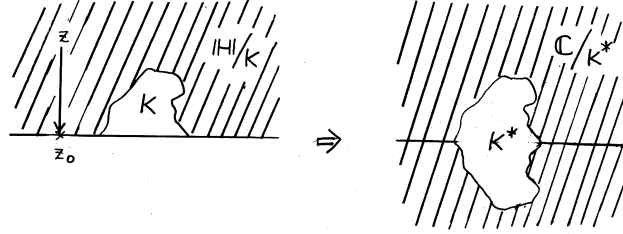


図 3: Schwarz の鏡像の原理の図.

- Möbius 変換:

$$f(z) = \frac{\tilde{a}z + \tilde{b}}{\tilde{c}z + \tilde{d}} \quad z \in \mathbb{H}, \quad \tilde{a}, \tilde{b}, \tilde{c}, \tilde{d} \in \mathbb{R}, \quad \tilde{a}\tilde{d} - \tilde{b}\tilde{c} > 0$$

は $\mathbb{H} \mapsto \mathbb{H}$ の共形写像である. 特に $\tilde{c} = 0, \tilde{d} = 1$ とおくと $f(z) = \tilde{a}z + \tilde{b}$ であり,

$$\begin{aligned} f \circ g_K(z) &= \tilde{a} \left(b(K)z + a_0(K) + \frac{a_1(K)}{z} + \frac{a_2(K)}{z^2} + \dots \right) + \tilde{b} \\ &= (\tilde{a}b(K))z + (\tilde{a}a_0(K) + \tilde{b}) + \frac{\tilde{a}a_1(K)}{z} + \frac{\tilde{a}a_2(K)}{z^2} + \dots \end{aligned}$$

となる. そこで, 与えられた g_K に対して

$$\tilde{a} = \frac{1}{b(K)}, \quad \tilde{b} = -\tilde{a}a_0(K) = -\frac{a_0(K)}{b(K)}$$

となるように Möbius 変換 f を選び, $f \circ g_K(z)$ を改めて $g_K(z)$ とすると,

$$g_K(z) = z + \frac{a_1(K)}{z} + \frac{a_2(K)}{z^2} + \dots \quad (1.1)$$

と展開できることになる.

(これを「流体力学的正規化条件 (hydrodynamic normalization)

$$\lim_{z \rightarrow \infty} (g_K(z) - z) = 0$$

を満たすように g_K を選ぶ」という.)

以下では常に, g_K として上のような共形写像を選ぶことにする. そうすると, $K \in \overline{\mathbb{H}}$ に対して g_K が unique に定まることになる.

- $a_1(K)$ は hull K の **capacity** とよばれる. 次を証明することができる. (証明を付録 A に与えた.)

正值性 $a_1(K) > 0$

スケーリング則 任意の $r > 0$ に対して $a_1(rK) = r^2 a_1(K)$

加法性 $J \subset K \subset \overline{\mathbb{H}}$ のとき, $L = \overline{g_J(K \setminus J)}$ とすると, $a_1(K) = a_1(J) + a_1(L)$.

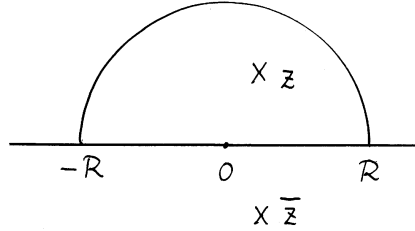


図 4: 複素積分の経路の図.

- Cauchy の積分公式を図 4 のように $C =$ 半径 R の上半円周 $\cup [-R, R]$ に適用する. z を C 内の点とすると, $\bar{z} \notin C$ なので, C 内で正則な関数 f に対して,

$$f(z) = \frac{1}{2\pi\sqrt{-1}} \oint_C \frac{f(\xi)}{\xi - z} d\xi \quad (1.2)$$

$$0 = \frac{1}{2\pi\sqrt{-1}} \oint_C \frac{f(\xi)}{\xi - \bar{z}} d\xi \quad (1.3)$$

が得られる. $|z| \rightarrow \infty$ で $f(z) \rightarrow 0$ であるとする, $R \rightarrow \infty$ で $\oint_C d\xi \rightarrow \int_{-\infty}^{\infty} d\xi$ となるから, この極限で (1.2) と (1.3) はそれぞれ

$$f(z) = \frac{1}{2\pi\sqrt{-1}} \int_{-\infty}^{\infty} \frac{1}{\xi - z} \{ \operatorname{Re} f(\xi) + \sqrt{-1} \operatorname{Im} f(\xi) \} d\xi \quad (1.4)$$

$$0 = \frac{1}{2\pi\sqrt{-1}} \int_{-\infty}^{\infty} \frac{1}{\xi - \bar{z}} \{ \operatorname{Re} f(\xi) + \sqrt{-1} \operatorname{Im} f(\xi) \} d\xi \quad (1.5)$$

となる. (1.5) の複素共役をとり (1.4) と辺々加えると

$$f(z) = \frac{1}{\pi} \int_{-\infty}^{\infty} \frac{\operatorname{Im} f(\xi)}{\xi - z} d\xi, \quad z \in \mathbb{H}$$

という公式が得られる (\mathbb{H} に対する **Poisson** の積分公式).

- いま $g_K : \mathbb{H} \setminus K \mapsto \mathbb{H}$ の逆写像を $g_K^{-1} : \mathbb{H} \mapsto \mathbb{H} \setminus K$ と書くことにして, 上の積分公式で $f(z) = z - g_K^{-1}(z)$ とおくことにする. $\xi \in \mathbb{R}$ のとき $\operatorname{Im} f(\xi) = \operatorname{Im} \xi - \operatorname{Im} g_K^{-1}(\xi) = -\operatorname{Im} g_K^{-1}(\xi)$ なので,

$$z - g_K^{-1}(z) = \frac{1}{\pi} \int_{-\infty}^{\infty} \frac{\operatorname{Im} g_K^{-1}(\xi)}{z - \xi} d\xi \quad (1.6)$$

両辺に z をかけると

$$z^2 - z g_K^{-1}(z) = \frac{1}{\pi} \int_{-\infty}^{\infty} \frac{z}{z - \xi} \operatorname{Im} g_K^{-1}(\xi) d\xi$$

を得るが、この $z \rightarrow \infty$ の極限を考えると

$$g_K(z) = z + \frac{a_1(K)}{z} + \mathcal{O}\left(\frac{1}{z^2}\right) \iff g_K^{-1}(z) = z - \frac{a_1(K)}{z} + \mathcal{O}\left(\frac{1}{z^2}\right)$$

であるから、

$$(\text{左辺}) = z^2 - z g_K^{-1}(z) = z^2 - z^2 + a_1(K) + \mathcal{O}\left(\frac{1}{z}\right) \longrightarrow a_1(K)$$

したがって、

$$a_1(K) = \frac{1}{\pi} \int_{-\infty}^{\infty} \text{Im} g_K^{-1}(\xi) d\xi \quad (1.7)$$

という capacity に対する積分表示が得られる。

2 Löwner 方程式の導出

$\text{hull } K_t = \overline{\mathbb{H} \setminus H_t}$, $t > 0$ は時間とともに増大し、したがって $a_1(K)$ の加法性より $a_1(K_t)$ の値も t ともに増大する. ($\lim_{t \rightarrow \infty} a_1(K_t) = \infty$ である.) $\gamma(t)$ のパラメータである時刻 t のスケールのとり方に任意性があるが、上述の $a_1(K)$ のスケールリング則があるので、時間スケールのとり方を固定しても議論の一般性は失われない。以下では、

$$a_1(K_t) = 2t, \quad t \in [0, \infty) \quad (2.1)$$

となるように、 $\gamma(t)$ の時間パラメータ t を定めることにする。

以下では $g_t \equiv g_{K_t}$ と書くことにする。また

$$U_t \equiv g_t(\gamma(t))$$

とする。 $\gamma(t)$ は道 $\gamma[0, t]$ の先端であり、その写像 U_t は実軸上にある。つまり U_t は時刻 $t \geq 0$ の実関数である。次を証明する。

定理 2.1 すべての $z \in \mathbb{H}$ に対して、 z が K_t に含まれない間は、 $g_t(z)$ は次の微分方程式を満たす。

$$\frac{\partial}{\partial t} g_t(z) = \frac{2}{g_t(z) - U_t}, \quad g_0(z) = z \quad (2.2)$$

これを **Löwner 微分方程式** という。

まず、次を示すことが出来る。(この証明は [1] を参照のこと。)

補題 2.1 $a_1(K_t)$ と U_t はともに t に関して連続である。

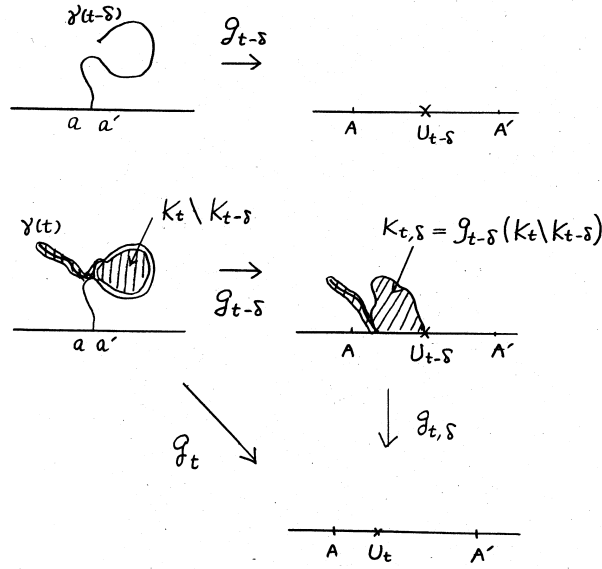


図 5: $K_t \setminus K_{t-\delta}$ と $K_{t,\delta}$ の図. $g_{t-\delta}$ と $g_{t,\delta}$ を合成すると g_t になる.

定理 2.1 の証明

$g_t(z)$ の左微分

$$\lim_{\delta \downarrow 0} \frac{g_t(z) - g_{t-\delta}(z)}{\delta}$$

を評価する. 時刻 $t-\delta$ での hull と時刻 t での hull との差 $K_t \setminus K_{t-\delta}$ を考える. そして

$$K_{t,\delta} \equiv g_{t-\delta}(K_t \setminus K_{t-\delta})$$

とする. また

$$g_{t,\delta} : \mathbb{H} \setminus K_{t,\delta} \mapsto \mathbb{H} \text{ なる共形写像}$$

とする. すると $g_t = g_{t,\delta} \circ g_{t-\delta}$ なので (図 5 参照)

$$\begin{aligned} \lim_{\delta \downarrow 0} \frac{g_t(z) - g_{t-\delta}(z)}{\delta} &= \lim_{\delta \downarrow 0} \frac{1}{\delta} \{ g_{t,\delta} \circ g_{t-\delta}(z) - g_{t-\delta}(z) \} \\ &= \lim_{\delta \downarrow 0} \frac{1}{\delta} \{ g_{t,\delta} \circ g_{t-\delta}(z) - g_{t,\delta}^{-1}(g_{t,\delta} \circ g_{t-\delta})(z) \} \end{aligned}$$

ここで (1.6) で $z = g_{t,\delta} \circ g_{t-\delta}(z)$ として得られる等式を用いると

$$\begin{aligned} \lim_{\delta \downarrow 0} \frac{g_t(z) - g_{t-\delta}(z)}{\delta} &= \lim_{\delta \downarrow 0} \frac{1}{\delta\pi} \int_{-\infty}^{\infty} \frac{\text{Im } g_{t,\delta}^{-1}(\xi)}{g_{t,\delta} \circ g_{t-\delta}(z) - \xi} d\xi \\ &= \lim_{\delta \downarrow 0} \frac{1}{\delta\pi} \int_{-\infty}^{\infty} \frac{\text{Im } g_{t,\delta}^{-1}(\xi)}{g_t(z) - \xi} d\xi \end{aligned}$$

を得る. $0 < \delta \ll 1$ のときは, $U_t = g_{t,\delta}(g_{t-\delta}(\gamma(t)))$ の近傍のみで $\text{Im } g_{t,\delta}^{-1}(z)$ は値をもつ. ($\delta \downarrow 0$ で, $g_{t,\delta} \rightarrow$ 恒等写像になるから, $\xi \in \mathbb{R}$ に対しては $\lim_{\delta \downarrow 0} \text{Im } g_{t,\delta}(\xi) = 0$ である. よって $\text{Im } g_{t,\delta}^{-1}$ の support は U_t の 1 点のみになってしまう. 図 6 参照.) したがって

$$\begin{aligned} \lim_{\delta \downarrow 0} \frac{1}{\delta\pi} \int_{-\infty}^{\infty} \frac{\text{Im } g_{t,\delta}^{-1}(\xi)}{g_t(z) - \xi} d\xi &= \frac{1}{g_t(z) - U_t} \lim_{\delta \downarrow 0} \frac{1}{\delta\pi} \int_{-\infty}^{\infty} \text{Im } g_{t,\delta}^{-1}(\xi) d\xi \\ &= \frac{1}{g_t(z) - U_t} \lim_{\delta \downarrow 0} \frac{1}{\delta} a_1(K_{t,\delta}) \end{aligned}$$

となる. ここで, capacity $a_1(K)$ に対する積分表示 (1.7) を用いた. 時刻のパラメータ t は (2.1) のようにスケールすることにしていたので, $a_1(K_{t,\delta}) = 2\delta$ であり, $g_t(z)$ の左微分が (2.2) の右辺に等しいことが導かれた. 同様にして, 右微分もこれに等しいことが示せる. ■

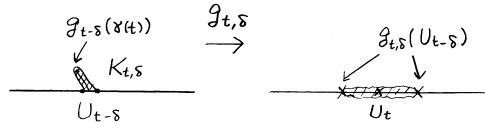


図 6: $0 < \delta \ll 1$ のときの $K_{t,\delta}$ とその $g_{t,\delta}$ による像の様子.

3 確率的 Löwner 方程式

$B_t, t \in [0, \infty)$ を原点からスタートする 1 次元標準ブラウン運動とする. $\kappa > 0$ を実パラメータとしたとき, 次の確率微分方程式を**確率的 Löwner 方程式** (stochastic Löwner equation) とよぶ.

$$\frac{\partial}{\partial t} g_t(z) = \frac{2}{g_t(z) - \sqrt{\kappa} B_t}, \quad g_0(z) = z \quad (3.1)$$

この方程式は, 右辺の分母 $g_t(z) - \sqrt{\kappa} B_t$ が零でないかぎり解をもつ. $z \in \overline{\mathbb{H}}$ に対して,

$$\tau(z) = \inf\{t : g_t(z) - \sqrt{\kappa} B_t = 0\}$$

とする. そして, 各時刻 $t \in [0, \infty)$ に対して

$$H_t = \{z \in \mathbb{H} : \tau(z) > t\}, \quad K_t = \{z \in \overline{\mathbb{H}} : \tau(z) \leq t\}$$

と書くことにする. $H_t = \mathbb{H} \setminus K_t$ である. H_t は単純連結領域であり, $g_t(z)$ は $H_t \mapsto \mathbb{H}$ の共形写像で $\lim_{z \rightarrow \infty} (g_t(z) - z) = 0$ を満たすものを与える. 確率的 Löwner 方程式 (3.1) の解として与えられる共形写像の族 $\{g_t : t \geq 0\}$ を **choral SLE $_{\kappa}$** とよぶ. このとき K_t はこのプロセスの hull とよばれる.

A capacity $a_1(K)$ の特性

A.1 正值性の証明

g を \mathbb{H} から \mathbb{H} の中への写像とすると, \mathbb{H} 内のすべての点 $z = x + \sqrt{-1}y$ において

$$y|g'(z)| < \text{Im } g(z)$$

が成り立つ. ここで g' は微係数を表わす. (これは **Schwarz の補題** から導かれる.)

いま $\text{hull } K \neq \emptyset$ として, g_K の逆写像である g_K^{-1} を考えると, これは \mathbb{H} から \mathbb{H} の中への写像なので上の不等式が適用できる. 特に z として $g_K(\sqrt{-1}y), y \in \mathbb{R}$ をとると

$$\text{Im} \left(g_K(\sqrt{-1}y) \right) \left| (g_K^{-1})'(g_K(\sqrt{-1}y)) \right| < y$$

となる. ここで自明な式

$$g_K^{-1}(g_K(\sqrt{-1}y)) = \sqrt{-1}y$$

の両辺を y で微分すると

$$(g_K^{-1})'(g_K(\sqrt{-1}y)) \times g'_K(\sqrt{-1}y) \times \sqrt{-1} = \sqrt{-1}$$

となるから

$$(g_K^{-1})'(g_K(\sqrt{-1}y)) = \frac{1}{g'_K(\sqrt{-1}y)}$$

である. したがって上の不等式は

$$y > \frac{\text{Im} (g_K(\sqrt{-1}y))}{|g'_K(\sqrt{-1}y)|} \iff y^2 - \frac{\text{Im} (g_K(\sqrt{-1}y))}{|g'_K(\sqrt{-1}y)|} y > 0$$

となる. $y \gg 1$ として, 展開 (1.1) を行おうと

$$\begin{aligned} g_K(\sqrt{-1}y) &= \sqrt{-1}y + \frac{a_1(K)}{\sqrt{-1}y} + \mathcal{O}\left(\frac{1}{y^2}\right) \\ \text{Im} (g_K(\sqrt{-1}y)) &= y - \frac{a_1(K)}{y} + \mathcal{O}\left(\frac{1}{y^2}\right) \\ g'_K(\sqrt{-1}y) &= \sqrt{-1} - \frac{a_1(K)}{\sqrt{-1}y^2} + \mathcal{O}\left(\frac{1}{y^3}\right) \\ |g'_K(\sqrt{-1}y)| &= 1 + \mathcal{O}\left(\frac{1}{y^2}\right) \end{aligned}$$

なので,

$$\begin{aligned} 0 < y^2 - \frac{y - a_1(K)/y + \mathcal{O}(1/y^2)}{1 + \mathcal{O}(1/y^2)} y &= y^2 - y^2 + a_1(K) + \mathcal{O}\left(\frac{1}{y}\right) \\ &= a_1(K) + \mathcal{O}\left(\frac{1}{y}\right) \end{aligned}$$

である. $y \rightarrow \infty$ の極限をとると, $a_1(K) > 0$ が結論される.

A.2 スケーリング則の証明

hull $K \neq 0$ を $r (> 0)$ 倍した hull を rK と記す. $\mathbb{H} \setminus (rK)$ を \mathbb{H} に写す共形写像が g_{rK} であるが, これとは別に写像 $g_K(z/r)$ も $\mathbb{H} \setminus (rK)$ を \mathbb{H} に写す共形写像である. ただし後者は流体力学的正規化条件を満たさない. そこでこの写像を r 倍した $rg_K(z/r)$ を考えることにすると, これは流体力学的正規化条件を満たす. ところが, hull rK が与えられると, 流体力学的正規化条件を満たす $\mathbb{H} \setminus (rK)$ から \mathbb{H} への共形写像は unique に定まるはずであるから

$$g_{rK}(z) = rg_K(z/r)$$

であることになる. $z = \infty$ の周りでの展開 (1.1) を両辺で行うと,

$$\begin{aligned} \text{(左辺)} &= z + \frac{a_1(rK)}{z} + \mathcal{O}\left(\frac{1}{z^2}\right) \\ \text{(右辺)} &= r \left(\frac{z}{r} + \frac{a_1(K)}{z/r} + \mathcal{O}\left(\frac{1}{z^2}\right) \right) \\ &= z + \frac{r^2 a_1(K)}{z} + \mathcal{O}\left(\frac{1}{z^2}\right) \end{aligned}$$

なので

$$a_1(rK) = r^2 a_1(K)$$

が結論される.

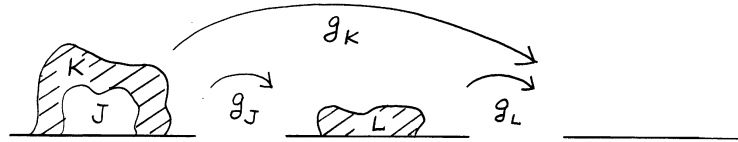


図 7: g_J と g_L の合成は g_K に等しい.

A.3 加法性の証明

$J \subset K \subset \overline{\mathbb{H}}$ であるような 2 つの hull J, K を考える. この 2 つに対応する共形写像をそれぞれ g_J, g_K とする. $K \setminus J$ の g_J による像の閉包を $L = \overline{g_J(K \setminus J)}$ と書き, $\mathbb{H} \setminus L \mapsto \mathbb{H}$ なる共形写像を g_L とする. 図 7 に示したように, g_K と $g_L \circ g_J$ は $\mathbb{H} \setminus K \mapsto \mathbb{H}$ なる共形写像であり, ともに流体力学的正規化条件を満たすので

$$g_K = g_L \circ g_J$$

である. g_K, g_L, g_J でそれぞれ展開 (1.1) を行うと

$$\begin{aligned} z + \frac{a_1(K)}{z} + \mathcal{O}\left(\frac{1}{z^2}\right) \\ = \left(z + \frac{a_1(J)}{z} + \mathcal{O}\left(\frac{1}{z^2}\right) \right) + \frac{a_1(L)}{z + a_1(J)/z + \mathcal{O}(1/z^2)} + \mathcal{O}\left(\frac{1}{z^2}\right) \end{aligned}$$

となるが,

$$\text{(右辺)} = z + \frac{a_1(J)}{z} + \frac{a_1(L)}{z} + \mathcal{O}\left(\frac{1}{z^2}\right)$$

であるから

$$a_1(K) = a_1(J) + a_1(L)$$

が結論される.

参考文献

- [1] W. Kager and B. Nienhuis, A guide to stochastic Löwner evolution and its applications, *J. Stat. Phys.* **115** (2004) 1149-1229.